
星の影

アレイシア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星の影

【Nコード】

N7103C

【作者名】

アレイシア

【あらすじ】

愛する人を失った二人の男がいた。彼らはそれぞれ全く違う時代に生まれ、異なった道を歩み、正反対の想いを抱きながらたった一つ、同じ願いを望んだ。それは正義。それは哀惜。それは空虚。それは傷。それは約束。それは光。それは理由。そしてそれは

愛。彼らはその願いを叶えるために自分のすべてを賭け、再び立ち上がる。二人の辿る道筋、その終幕に一体何が待っているのだろうか。燃え盛る太陽は、今日もまた、昇る。 。 1/2、やっと第一話を改訂しました。これから少しずつ頑張りたいと思います。

プロットが多少変わり、更に区切りとして、過去の作品は削除しました。

s i l e n c e 静寂 (前書き)

明けてましておめでとございます。

これから少しずつ改訂版を更新していこうと思います。詳しい説明

(弁明?) は後書きで。

2008年1月2日

S i l e n c e 静寂

月が煌々と輝く夜。

雲一つ無い夜空に浮かぶ幾つもの星達は月と共に瞬き、共鳴し、微かな光となってこの世界に降り注ぐ。その光は深淵のように暗い森を照らし、奈落より深い黒色の海を照らし、人々が寝静まる真夜中の街並を照らし出す。

永遠とも言えるほどの長い時の中で月や星はただ輝いているだけだった。何も求めず、何も感じず、世界の闇に光を指し続ける。それはおそらく昔から変わらない。だからきつと、今も光続けている。それはまるで、漆黒色の絶望で溢れるこの世界に指し込むわずかな希望のようだ、と彼は思った。

「何考えてるの？ デイレン。」

その光が照らす静かで薄暗い街の裏路地に大小二つの影があった。木造の壁に背を預けて空を見上げていた大きな影が声のする方を見ると、そこにはよく見慣れた小さな影がこちらを覗き込んでいた。

「どうしたの？ 具合でも悪いとか？」

スカイブルー色のパッチリとした大きな瞳に年相応の幼い顔立ち。少し大きめの黒いコートを着ており、袖からわずかに指が出ているその風貌はとても可愛らしい。一見すればまるで可憐な少女のようなその少年は、眉間に皺を寄せて不安そうな顔をしながら真っ直ぐ自分を見つめていた。

「…いや、大丈夫だ。」

ディレンと呼ばれた大きな影はそう呟くと、冷たいそよ風に揺れて右目にかかった黒い前髪をゆっくりと払った。整った凜々しい顔立ちに少し吊りあがった漆黒の瞳。その鋭い目付きは自然とクールな印象を与える。少年と同じ色の黒いコートを優雅に着こなしているその容姿は、誰もがカッコいいと思うだろう。彼は腰に飾りつけの無いシンプルな長剣を携えている。

「本当に？」

「ああ。気にするな。」

そう言いながらディレンは笑みを浮かべ、少年の頭にポンツと優しく手を置いた。

「ん…それなら良いけどさ。」

ディレンが少年の青い髪を撫でてやると少年の不安そうな顔は段々と綻び、ついには気持ち良さそうな笑顔になる。まるで猫みたいだな、と言うと怒るので、ディレンは心の中でだけ呟いておいた。

「それにしても、本当にここに来るの？　なんかそんな気配全く無いんだけど。」

「間違いなく来る。例え来なくても、また一からやり直せば良いだけだ。」

ディレンはそう言うと少年から手を離し、着ている黒いローブのポケットに手を入れた。それを聞いた少年は、えー、と嫌そうな顔を

する。

「一からやり直すのだけは嫌だなあ。そうなったらディレン一人でやってよ。」

「そう言うな。『太陽の宝玉』が関係している可能性もある。」

「…あんなチンピラが持つてるとは思えないけど。」

少年はその可愛く幼い風貌とは裏腹に、目を細めて、チツ、と舌打ちした。

「…そんな顔をするな。」

「だってあいつら、僕のこと女と間違えたんだよ？ 極刑という名の断罪を行使するべきだと思うね。あのロリコン共。」

まだ年端もいかない少年が言ったとは思えない言葉が次々と並べられ、ディレンは思わず目を丸くする。

「……ケイ、そんな言葉どこで覚えた。」

「ん？ この前リアンがくれた本に書いてあったよ。あれ、使い方間違ってた？」

「いや、あってるが……。」

ディレンは、まるでなんとも思っていないケイになんとも言えず、引きつった笑みを浮かべた。

「だよ。意味はリアンとファニアに教えてもらったから完璧だよ。」

「……そうか。」

子供になんという言葉を教えるのだろうか。ディレンは小さくピースをしながら笑顔を浮かべるケイを見ながら、別行動しているであろう二人の女を後で説教することを心の中で誓うのだった。

とその時、じやり、という足音が聞こえた。二人が咄嗟にバツと音のする方へ振り向く。が、視界には薄暗い空間が広がるだけで姿は見えない。よくよく耳をすませばそれだけではなかった。他にも複数の同じ足音とカチャカチャという音が、小さいが確かに聞こえ、そして近付いている。

「来たな。」

「良かった。これでこの依頼も終わりだね。」

「……いや、これからが本番なんだが。」

思考の噛み合わない二人の前に暗闇から現れたのは、体格の良い五人の男だった。その誰もが腰に剣を携え、その姿からは明らかに殺気を醸し出している。

「ディレン…ストロードだな。」

ピリピリとした緊張感の中、一番前に立つ白い髭を生やした男が低い声を放った。一方のディレンは何も答えず、男達を見据える。

「答えぬか……まあいい。それで、何の用だ？」

「お前を捕まえに来たんだよ。」

ディレンの隣に立っているケイはそう言うと、ザッ、と前に出る。白髭の男はその姿を見て目を見開いた。

「お前は…あの時の小娘か。」

「僕は男だ！ このクズ共！ あの時はリアンに無理矢理カツラをさせられてだな……。」

「ケイ、話がこじれるから少し下がってる。」

ディレンは未だ興奮気味のケイを後ろに下がらせ、男達の目の前に立った。一方の男達はケイが男だったという事実には驚いているのか、目を開いたまま啞然としている。

「…リール＝カイラス。」

ディレンが唐突にそう呟くと、驚いていた男達の眉がピクッと吊り上がった。

「リリア国有数の製薬会社を経営し、更に国の医療魔法機関も統括する権力者。が、裏では非合法の薬を生産しそれを売る闇の商人。」

「…良く調べたものだ。」

白髭の男はそう言うと手を口にあて、くっくっく、と笑った。

「客にしては少しおかしいと思っていたのだよ。まさか騎士だとは

思っていないかったがね。」

「残念だが、俺は騎士ではない。」

「ほう……ならば貴様らは何者だ？」

騎士ではないという発言に目を見開いた白髭の男が興味深そうに聞くが、ディレンはそれ以上何も言わなかった。その様子を見た白髭の男は感心したように二、三度頷く。

「なるほど、それも答えぬか。君は頭が良い。」

「そんなことどうでも良いからおとなしく捕まれよ、クズ。」

ディレンの後ろにいるケイが白髭の男を強く睨みつける。白髭の男は、ふっ、と見下すかのように嘲笑した。

「まあそう慌てるな、小娘。」

「僕は男だ！」

「ケイ、頼むからちょっと黙っててくれ。」

ケイはまだ何か言いたそうにしていたが、ディレンに鋭い目で睨まれて、ぐっ、と口を閉ざした。

「一つ聞きたいことがある。」

ディレンは白髭の男に向き直ると、唐突に口を開いた。

「『太陽の宝玉』を知っているか？」

「…『太陽の宝玉』？」

白髭の男は一瞬不思議そうな顔をするが、何かを思い付いたように薄笑いを浮かべた。

「……その答えはこいつらに聞くと良い。」

白髭の男は後ろにいる四人の屈強そうな男達を指でさすと、突然デイレン達に背を向け一人歩き出した。

「どこへ行く。」

「帰るに決まっているだろう。客で無いのなら私の相手ではないからな。時間を無駄にしたくないのだよ。」

「待てよ。質問に答えろ。」

「その必要は無いな。何者かは知らんが、捕まえに来たという輩にわざわざ教える馬鹿もいまい。」

「じゃあ捕まえて意地でも吐かせる。」

ケイがそう言った瞬間、白髭の男は突然ピタッと立ち止まりこちらを振り返った。

「…面白い。やれるものならやってみよ。華奢な小娘が。」

白髭の男はそう言うと、口角を吊り上げいやらしい笑みを浮かべた。

その言葉にケイは一瞬険しい顔をし、そして白髭の男と同様に笑みを浮かべる。そのこめかみにはくつきりと青筋が立っていた。

「……仏の顔も三度までだよ。後悔するなよ、くそジジイ。」

「おい、ケイ……。」

完全に切れたケイは懐から短剣を取り出し、ディレンの呼びかけにも答えずに一気に男達の中へと突っ込んで行った。男達は腰につけている剣を抜き、ケイに襲いかかる。完全に置いて行かれたディレンは一人頭を抱えた。

「……やれやれ。」

目の前には、うおおお、と大声を出してケイに剣を振りかざす四人の男と、その刃を器用に避けるケイの姿が繰り広げられている。この様子では寝ている近隣の住民がそのうち気付いてしまうだろう。そうなればせつかくこの真夜中という時間帯に呼び出した意味もなくなってしまう。もっと穏便に行きたかったディレンは、はあ、とため息をつく、シャツと腰の長剣を抜いた。

「……まあいいか。」

ディレンはそう呟くと、修羅場と化すであろう小さな戦場に身を投じた。

その翌日。

情報管理機関により出された号外の一面には、こう書かれていた。

『リール』カイラス氏、薬の違法製造及び違法取引の容疑で逮捕される。』

s i l e n c e 静寂（後書き）

こんにちは、作者のアレイシアです。

更新を停止してから約二か月くらいでしょうか。その間色々考えました。

スランプに陥ったり、忙しかったり、拳句の果てにはこの作品を投げそうにもなりました。

けれど、この『小説家になろう』に投稿された数々の作品を見ながら、やはりラストまで書きたいという思いが強く、また書き始めることにしました。

まだまだ若輩者ですが、それでも自分なりに精一杯頑張りたいと思います。目標は

「せめて読めるくらい作品に。」これ以上は望みません！

ですのでこれからもよろしくお願い致します。

2008年 1月2日

u n d e r t a k i n g 仕事

「ねえデイレン。こんなことする必要ある？」

強い怒りの込められたその問いに、デイレンは冷や汗を流しながら目を泳がせた。

「…あるんじゃないか？ 少なくとも、あいつらにとっては、だが。」

セーレ大陸の中央に位置する国、リリア。

大陸の中でもかなりの領土を占めるこの国は昔と違い、今では沢山の行商人が訪れる巨大な商業都市として名を馳せている。

というのも今から約二百年前、セーレ大陸は戦乱の真っ直中であった。大小百以上の国が大陸中に散らばり互いが互いを潰しあうこの時代、リリア国は強大な軍を持っていたわけでもなく広大な領土を支配していたわけでもない、ただの矮小な軍事国家であった。

しかし、まだ若干20歳で即位した時の王、フィンテロドリオットは数多くの小国が倒され巨大な国に吸収されて行く中で類稀なる奇才による謀略を巡らせ、多大な犠牲を払いながらもなんとか潰されずに勝ち抜き、戦乱が治まった五十年後、気がつけばリリア国は強大な軍と広大な領土を手にする大国に姿を変えていた。

戦後、大陸中の国々で停戦協定が行われると、人々の関心は争いか

ら平和へと移行していった。これまで軍事力でのし上がり、隣にあった巨大国家ですら倒したリリア国がこれ以上武力での繁栄は不可能だと判断すると、大国の王となったフィンテロドリオットはその広い領土を活かした商業に着目した。

まず自国の主要都市すべてに巨大な市場を開き、他国へ渡ることができる街道を作ることから始めた。そしてある程度の街道が整備されると、国境付近にある関所で行われる入国審査を廃止した。それは単に国に入りやすくしただけではなく、リリア国の平和と自由を他国の人々に象徴するためでもあった。その代わり関所には軍を派遣し、犯罪者が国外へ逃亡するのを防ぐ役割を与えた。その結果、密輸や偽装などの犯罪は確かに増えてしまったが、それはリリアのに大いなる繁栄をもたらした。

こうしてリリア国は百五十年前に作られたその制度を受け継ぎ、現在は大陸の巨大な商業国として大陸に名を轟かせているのだった。

「……なんで僕がこんな格好をしなきゃいけないんだ。」

リリア国の王都、ラビエンヌ。

リリア城の城下町、そして国内でも最大の広さを持つ巨大市場があることで知られるこの街は、三つの区から成っている。

木造の住居が建ち並び、大通りにはそこに住む人々が生活できるように食べ物、服、生活用具等の商店がある一般的な街の装いを見せる西区。

他国から来た商人や旅人のために作られた多くの宿場を中心とし、武器や防具の店、酒場が取り巻く普段は閑静な東区。

沢山の商人や旅人が訪れ、個人のいらぬガラクタから珍しい高価な宝石まで様々な商品が売られている大通り、俗に言う巨大市場が存在する、街で一番華やかな南区。

そして北側にはラビエンヌを含めたリリア国内すべてを統治する口ドリオット家が住む巨大な城、リリア城が築かれている。

「確かそれは、賭けに負けた罰ゲームだっただろう？」

「だからってこれは酷いよ！ 人の弱味につけ込みやがって。」

「弱味というか、自業自得じゃ……。」

「なんか言った？」

「……いや。」

ラビエンヌ南区、大通り。

リリアの歴史の中でも最も早く市場を開き、今では経済の基盤と言っても過言ではないほどの収入を出し続けるのがこの南大通りで開かれている巨大市場である。その名は他国の庶民や豪商人、名のあがる貴族、更には他国の王族にまで広く知れ渡っており、毎日数多くの人がこの場所を訪れ賑わっている。その量といえば、通りを歩く時は他人に肩をぶつけずには歩けないほどだ。

「あのくそアマ……絶対恥かかせてやるからな。」

その大通りの軒先にズラツと並ぶ出店の中に一際目立つ店があった。その店は特別な外装が施されているわけでもなく、これといって珍しい商品があるわけでも無いのだが、通り過ぎるほとんどの人から

奇異の視線を向けられ、時折人ばかりもできる。では一体何が目立つのかというと、それは店番をしている売り子の格好だった。

紺色で膝を隠すくらいの長さのふわふわとしたスカートに、同じく紺色で半袖の袖口に白いフリルがついた非常に可愛らしい上着。それは明らかにウエイトレスの姿だった。

「くそつ。こつち見るなよな……。」

そうやって先程から悪態をついているのは、そのウエイトレス姿をしているケイである。彼はその格好に伴ってかブロンドのカツラを被り、更には口紅や頬紅、アイシャドウなどの薄い化粧も施されている。その姿は黙っていれば美少女と見間違えてもおかしくはないほど綺麗だった。彼は見られるのが恥ずかしいのか、顔をうつすら赤くし俯き気味に伏せている。

「賭けなんてやめたらどうだ？」

その隣でケイに声をかけているのは無論ディレンである。恥ずかしい姿のケイとは違い、彼は青いTシャツに黒のジーパンといったラフな格好をしている。

「まだリベンジしてないんだよ！ やめてたまるか！」

「……そうか。」

やる気満々といったように眉間に皺を寄せ、胸の前で拳を握り締めるケイを横目にディレンは思わず、はあ、とため息をついた。

何故ケイがこんな辱めを受けているかと言うと、それは昨日の夜に

行われた『七並べ大会』なるもののせいであった。参加者はディレンとケイト、後この二人と行動を共にする二人の女、という計四人そしてこの大会の目玉は、勝者が敗者に何でも一つ命令できるという容赦無い特典だ。そうして一介の宿で繰り広げられたそれは、遊びにしてはあまりにも真剣で、勝負にしてはあまりにもくだらない内容だった。

兎にも角にも、その大会で圧倒的に負け続け十戦して八回も最下位を獲得することになったケイトは、逆に圧倒的に勝ち続け五勝を上げたりアンの言うことを一つ聞かなければならなくなったのだ。そういうわけで、今に至る。

「……次は絶対負けない。」

「いや、それは良いから接客してくれないか？ さっきから俺しか動いてないんだが。」

ディレンが客の男性から銀貨を二枚受けとりながらそう言うと、ケイトは、はっ、と気がついたように意識を取り戻した。

「あ、ご、ごめん。つい忘れてたよ。」

「……忘れていたのか。」

えへ、と笑うケイトを見て、ディレンは思わず額に右手を置きさらに呆れ気味のため息をついた。

「そつえばさ、あの後何かあったの？」

「あの後？」

「…あのくそジジイを倒した後。」

「ああ、この前のあれか。」

嫌そうに言うケイを尻目に、ディレンは遠い記憶を思い出すかのようになぞらえた。

二日程前、ケイとディレンが白髭の男を呼び出したあの日。その後二人は四対二であったにも関わらず、瞬く間に男達を叩き伏せた。そして恐怖し震え逃げ出そうとする白髭の男を掴まえると首に剣を押し付け、二人は質問会という名の尋問を始めた。それがどんな内容だったかはあえて特記しないが、尋問というよりも拷問に近い形だった、とだけ言うておこう。

特にケイは子供とは思えないような言葉（基本は下ネタ）と口調（主にヤクザやヤンキー）、そして顔（目が据わっていて口元は笑っていた）を駆使し、震える白髭の男に色々無理矢理吐かせようとしたが、知らないの一点張りだった。結局二人は諦めて、素直に男を役所に連れて行くことにした。その際にディレンはケイと別れ一人、非合法の薬を製造する工場、つまり男のアジトへ向かい壊滅的な打撃を与えたのだ。

「あのジジイ結局何も知らなかったし、リアンとファニアの所も収穫なかったし。あの後残党狩りに行ったんでしょ？　なんか良い情報なかった？」

「何も無かったな。何人が尋問したが、全員太陽の宝玉の存在すら知らなかった。」

「そっか。じゃあ結局大外れだったんだね。」

「そんなとこだな。」

「あーあ、絶対知ってると思ったのになあ。」

ケイはため息混じりにそう言うと、実に残念そうな表情を浮かべた。

「そう落ち込むな。依頼者からの報酬はちゃんともらっている。」

「それは小遣い稼ぎでしょ？ 本来の目的と違っじゃない。」

「まあな。だが焦っても仕方ないだろう。」

「そりゃそうだけど……。」

「急いでいるわけじゃない。ゆっくり探せばいい。」

「……いつも思うけど、ディレンってすごいマイペースだね。」

「そうか？」

ディレンは優しい笑みを浮かべながら、呆れて肩を落としているケイの頭に優しく手を置いた。ケイは不満そうなジト目でこちらを見上げていたが、それも今の姿では可愛いらしく映るだけである。

ディレンはケイを一瞥した後、物憂げな表情を浮かべて遠く青い空を仰いだ。

「……ゆっくりでもいい。だが、確実に探し出してみせる。」

ディレンは小さく、誰にも聞こえない程度に呟いた。

「あ！ あれケイちゃんじゃない？ ケイちゃん！」

突然、聞き覚えのある実にわざとらしい声が二人の耳に届いた。その瞬間、ディレンは口角を引きつらせ、ケイは思わず眉をピクツと吊り上げる。二人が声のする方を見ると、そこには人の合間を縫うように走って来る二人の女の姿があった。

「おーい、ケイちゃん！」

「ちゃんを付けるな！ 馬鹿リアン！」

大きく手を振る女を見てディレンは、うるさいのが来た、と嫌そうに呟き、一方ケイは顔を真っ赤にしながら、来るな、と力一杯叫んでいる。余程あの二人、というよりはケイがリアンと呼んでいる女に来て欲しくないのだろう。しかし当然そんな二人に構うはずもなく、女二人は堂々と店の前へとやってきた。

「やっぱよく似合ってる！ 可愛いわーケイちゃん！」

そう言ったのは、赤く長い髪を後頭部で結び上げ非常に喜々とした笑顔を浮かべるリアンと呼ばれた女だった。彼女はどちらかというところ可愛らしいと言うよりも美人といった容姿をしており、身長も女性にしては高いほうだろう。白いＴシャツに青いデニム生地ホットパンツは露出が高く、子供にはあまりよろしくない姿だ。

「触るな！」

頭を撫でようとしたリアンの手をケイがパシッと払いのけると、リ

アンは、ふーん、と目を細めて呟いた。

「そんな態度取って良いの？ 私はお客よ？ おしとやかに接客しなきゃダメって言ったわよね。 命令違反で明日も言うこと聞いてもらおうわよ？」

「……………うぐつ。」

「ほーら、よしよし。おしとやかにねー。」

リアンは大人しくなったケイの頭を満足そうに優しく撫でる。ケイが顔を真っ赤にしたまま握り拳を作ってかすかに震えている所を見ると、相当恥ずかしいらしい。一連の様子を見ていたデイレンがふと辺りを見渡せば、いつの間にかギャラリーが続々と集まって来ていた。考えてみれば、男言葉の反抗的なウエイトレスがなだめられているという構図も確かに珍しい。

「リ、リアンさん、ダメですよ。これじゃあケイさんがあまりにも可哀相です。」

そう言ったのは、これまでリアンの隣で何度もそのからかいを制止しようとして試みていたが結局タイミングを失ってやっと今止めに入った銀髪の女である。前髪は目にかからない程度に切り揃えられおり、後髪は腰まであるロング。顔立ちは可愛く大きな銀の瞳が印象的な彼女は白のワンピースとその下に黒のレギンスを着ており、その立ち振る舞いには気品が感じられる。

「えー。罰ゲームなんだから良いじゃない。ファニアも撫でておかないと後悔するわよ？ もうこんなチャンスなんて二度と無いかもしれないんだから。」

リアンはそう言ってファニアを誘うが、ファニアはチラツと羨ましそうにケイのほうを見ただけですぐさまリアンに向き直り、首を横に振った。

「……で、ですけど、それでも公衆の面前でそれは良くないと思います!」

その様子を見たりアンは、段々気持ち良くなって顔が緩みそうになっているケイの頭を手をおいたまま、目を細めてニヤツと笑いファニアにしか聞こえないように耳元で囁く。

「さてはあんた、ケイと二人きりになって……したいのね?」

「なっ……!」

それを聞いた瞬間、ファニアはゆでだこのように全身真っ赤になった。

「ち、違います!」

「隠さなくても良いのよ。それなら仕方ないわ。二人で宿にでも行って来なさいな。」

「で、ですから違いますっつてば!」

リアンはクスクスと笑いながら、何かなんだかよくわかっていないケイをファニアの前まで持って来ると、ケイの背中をポンツと押し

「うわっ！」

「きゃー！」

その瞬間、一部のギャラリーから、おおっ、という歓声が上がった。ケイはファニアの胸へと飛び込み、ファニアはそれを咄嗟に抱き留めている。

「な、何するんだよりアン！」

ケイは余りの恥ずかしさに顔を真っ赤にしながら後ろを振り向こうとするが、何故か身体が動かない。よくよく見ればケイをがっしりと抱き締めているその腕の力が強く、振り返ることができないようだ。

「……………ファニア？」

背筋に嫌な悪寒が走りながらもケイはファニアを見上げた。その表情は頬を赤く染め、つぶらな瞳でこちらを見ている。例えるならそう、可愛い子犬を抱き締めている子供のようである。だが今この時に限っては、ケイの瞳には正体不明の恐怖しか映っていないかった。

「デイレンさん、リアンさん……………お借りします！」

「え？ ファニア、何言ってる……………うわあああああ！」

完全に暴走し始めたファニアはそう言っていると悲鳴を上げるケイを連れ、ギャラリーの合間を物凄い速さで去って行った。そのスピードは圧巻。もしかしたら風よりも速いかもしれない、と残された二人だけでなく周りのギャラリーですら啞然とした。

「……行かせて良かったのか？」

ディレンはしばらく間を置いてから、満足げな表情を浮かべるリアンに視線を向けた。リアンは腕を組み、んー、と人指し指を顎に当てる。

「良いんじゃない？ ケイもこれ以上醜態を晒さなくて済むわけだし。」

「いや、そうじゃなくてだな……。」

「ああ、ファニアなら襲ったりしないわよ。あの子、可愛いものが好きなだけだから。単純にあの姿のケイが可愛かったんでしょね。」

何かのイベントが終わったかのように消えて行くギャラリーを見ながら、リアンはあっけからんと言いつつ放った。一方ディレンは何か心配事でもあるのか、難しい顔をしている。

「…逆の可能性は？」

「へ？」

「ケイがファニアを襲う可能性もあるんだが。一応あれでも14だぞ。」

「……………」

リアンが沈黙するところを見ると、それについては考えていなかった

たらしい。リアンはしばらくそうしていると突然目を伏せ、他人事のように「う」言った。

「……青春よね。」

「……まあ、本人達が良ければいいんだがな。」

ディレンはまるで二人の父親のようにそう言うと、うんうん、と頷いているリアンに視線を戻し、誰にも聞こえないように静かにため息をついた。

「で、何があった？」

「え？」

「とぼけるな。また面倒事持ってきたんだろう？」

「あら、やっぱりバレてたのね。」

リアンは後頭部を掻きながらディレンの顔を伺うような笑顔を浮かべた。ディレンは、当然だ、といわんばかりのすまし顔をしている。

「お前が俺の所へ来る時はいつもそうだろう。」

「そうだったかしら？ 最近物覚えが悪くって。」

「はは……で、何の用だ。」

リアンのボケに苦笑を浮かべつつディレンは話を進める。その反応に一瞬冷たい視線を向けるリアンだったが、すぐさま本題を話し始

めた。

「実はね、お母さんとはぐれたっていう女の子がいるの。探してあげてくれないかな？」

「…悪いが、俺はここを離れられない。」

「そんなことわかってるわよ。お母さんは私が探すわ。だから、その間女の子を預かって欲しいの。」

お願い、と手を合わせるリアンに何か違和感を感じながらもディレンは、それぐらいならいいか、と思いつい、肯定の意味で頷いた。それを見たリアンの顔は、一瞬にしてパツと華やいだ。

「ありがとうディレン！ じゃあ早速女の子を連れて来るわね！」

「おい、ちょっと待……。」「

ディレンが了承したことに気を良くしたのか、リアンはまだ何か言いたげなディレンを無視し、あつという間に人混みの中へと紛れて行った。

「……………」

ぽつんと一人取り残されたディレンは、まあいいか、と呟いた。そして通り過ぎる人並を見ながら本当にこれで良かったのかと思考する。すると、あることに気がついた。

「……………本当に探す気があるんだろうか。」

普通、本当に探す気があるなら自分で女の子を連れて探しに行くのではないだろうか。いや、一緒に探して欲しいと言われるならわかる。だが、何故その手掛かりとも言える女の子を誰かに預ける必要がある。これではまるで。

ディレンは思考の末、ある結論に辿り着いた。

「…お守りか。」

ディレンはこれからやって来るであろう災害を思い、今日一番のため息を盛大に吐くのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7103c/>

星の影

2010年10月14日13時46分発行